

さいおういんよどみのせき

西翁院澗看席の空間特性に関する研究 —茶事における空間体験の分析を通して—

建築デザイン分野 A02T308 木村貴志

1. はじめに

本研究は、金戒光明寺西翁院にある澗看席¹（成立：1685～1686）及びその露地を研究対象とする。澗看席が他の茶室と大きく異なる点は傾斜地に建てられ、西の山々が借景として生かされている事である。本研究は澗看席における露地をも含めた茶室空間がどのように構成されているか、さらにそれがどのような意味を持っているのかを明らかにする事を目的とする。具体的には茶会の流れに従い、茶室と露地を構成する要素²に着目し分析を行うことで、澗看席の空間の特性を明らかにしたい。

2. 道順の決定

本研究では茶会の流れに従って分析を行うため、茶会の復元及び道順を決定する。資料として庸軒の茶会記³と基本的な茶会についての文献⁴、澗看席の図面⁵を使う。それらを用いて妥当な道順を導き出した。⁶その道順は次の通りである。1 書院→2 南の露地→3 中門→4 腰掛待合→5 内露地→6 茶室内部→7 内露地→8 腰掛待合→9 内露地→10 茶室内部→11 内露地→12 書院(図1参照)

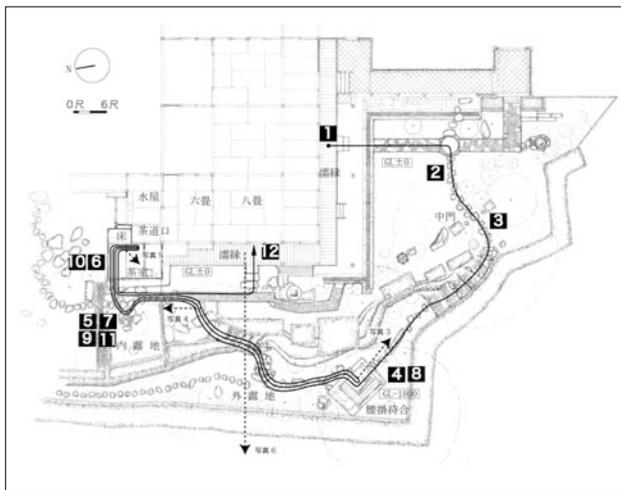


図1 茶会の道順 (図面：筆者作成)

3. 構成要素の抽出

ここでは先で導いた道順に従い澗看席の空間をシークエンスとして捉える。まず澗看席のシークエンスを分割する。⁷(表2参照)そして分割した場面毎に場면을構成している要素とその要素が客に対して及ぼす作用を抽出する。この際、空間の特性を捉えるため客の視覚に対する作用に着目する。⁸さらに様々な研究者による空間の印象と抽出した要素及び

茶会の道順	シーン	行動
南の露地	1	延段1を歩く
	2	飛石8を歩く
	3	中門を渡る
腰掛待合	4	石段②を下りる
	5	飛石を歩く
	6	腰掛待合に腰をおろし、亭主の向かい付けを待つ
内露地	7	飛石①を歩く
	8	東側に折れ曲がり石段③を上る
	9	延段④を歩く
茶室内部	10	内露地に入り飛石7を歩く
	11	露庭⑤における手水の動作
	12	開口に至る
内露地	13	調り上がる
	14	定位置に着座する
	15	亭主によって火灯口が開けられる
腰掛待合	16	亭主によって濃着窓が開けられる
	17	開口を下りる
	18	内露地を歩く
内露地	19	延段⑥を歩く
	20	西側に折れ曲がり石段③を下りる
	21	飛石①を歩く
茶室内部	22	腰掛待合に腰をおろし、亭主の向かい付けを待つ
	23	飛石①を歩く
	24	東側に折れ曲がり石段③を上る
内露地	25	延段⑥を歩く
	26	内露地に入り飛石7を歩く
	27	露庭⑤における手水の動作
内露地	28	開口に至る
	29	調り上がる
	30	定位置に着座する
内露地	31	亭主によって火灯口が開けられる
	32	亭主によって濃着窓が開けられる
	33	開口を下りる
書院	34	内露地を歩く
	35	延段⑦を歩き石段④を上る
	36	書院西側の濃縁から庭を鑑賞する



写真3 腰掛待合に座る (写真：全て筆者撮影)



表2 澗看席における客の行動 写真4 内露地

その作用を照らし合わせる。ここで茶室内部と露地における典型的な事例としてシーン6の腰掛待合に腰を下ろし、亭主の向い付けを待つ場面、シーン10の内露地を歩く場面、シーン14の茶室に着座する場面、シーン36の庭を觀賞する場面の4つの場面を取り上げる。

■シーン6：腰掛待合に座る。腰掛待合と書院の間には石垣があり、その上に刈込が配されている。その石垣、刈込により書院への視線は遮られる。視線を南へ向けると石段が弧を描きながら壁のように立ち上がっているため、南庭の様子は見えない。さらに腰掛待合の建つレベルから高さ十尺程の刈込により西側の市街地への眺めは絶たれる。このように「視線を遮る」作用をする刈込、石垣、石段の要素により閉鎖的な空間が作り出されていると考えられる。また中村昌生はこのシーン6の腰掛待合の建つ一段下がったレベルの露地を「谷底のような場所」と述べている。⁹また西澤も同様に「谷底に囲い込まれた露地」¹⁰と説明している。(写真3参照)

■シーン10：飛石を伝い四つ目垣の間を通り、約四坪の内露地に入る。飛石の上を歩く時は足下を注意しなければならず視線は下がる。内露地は高さ四尺六寸五分の四つ目垣と植え込み及び袖垣により北と南と西の三方を囲われている。外露地の様子は分かるものの、上部には差し掛けが架かっており周辺から隔離されている。このように「視線を遮る」作用をする四つ目垣、差し掛け、袖垣という要素で構成されているため極めて閉鎖的な外部空間が作り出されていると考えられる。この内露地について西

澤は「あたかも室内のような雰囲気」の造り出された外部空間である」と述べている。¹¹ (写真4参照)

■シーン 14：二畳の客座と一畳の点前座との境には、上部が吹き抜けている高さ五尺の仕切壁がある。そこに高さ三尺九寸四分、幅二尺三寸の火灯口があげられている。向切の炉の角に中柱を立て、無目を一線にしている。火灯口には白い太鼓襖が入っている。そのため点前座への視線が遮られ茶室内部は広さ二畳であると感じる。¹²中村昌生は澗看席の特徴の一つである宗貞囲について「火灯口のある仕切壁によって、点前座は次の間のように客座から隔離される」¹³と述べている。言い換えれば、仕切壁はまさしく「視線を遮る」作用をしていると言える。(写真5参照)



写真5 茶室内部

■シーン 36：石段を上り、書院西側の濡縁から庭を觀賞する。高さの異なる刈込が二重三重に折り重なって書院の庭を構成している。それらの刈込は近景を遮り遠景を取入れている。そのため刈込越しに京都市街を見る事ができ、さらに遠くの山並みを一望できる。刈込の「近景を遮り遠景を取り入れる」作用により眺望に適した空間が作り出されていると考えられる。西澤は書院西側からの眺めを「はるか下方へ下り眺望絶佳」と述べている。中村はこの展望を快闊なものであるとし、西澤に通じる印象を述べている。また刈込の作用がシーン4での「視線を遮る」作用から「近景を遮り遠景を取り入れる」へ変化している事を確認できる。(写真6参照)



写真6 遠景を取り込む刈込

以上のような分析を全ての場面において行い、そこから得られた構成要素の特徴を整理したかたちで示すならば、次のようになる。

- 1) 一つの要素が複数の異なる場面においてみられる。その際、その要素の作用が変化する。またその要素が澗看席の様々な場面を作り出している。(シーン4・シーン36)
- 2) 一つの場面において、同じ作用をする要素が複数存在する。(シーン4・シーン6)

4. 対比的空間

ここでは3で個別的に分析してきたものをより包括的に捉えるために、澗看席を茶室内部、内露地、書院露地、西露地、南露地、書院に分ける。茶会の流れに従うと

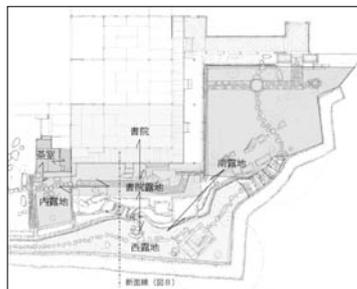


図7 澗看席における様々な露地

客は南露地→西露地→書院露地→内露地→茶室内部の順序で露地を進む。そこで隣り合う空間、つまり図7に示すような組み合わせについて比較分析を行う。その比較分析の事例として西露地と書院露地を取り上げる。

■西露地と書院露地

西露地は觀賞用の露地ではなく通ることを目的とした露地である。ここでは刈込が視線を遮る。また飛石が配置されており、それは不安定であるため客は下を向いて歩かなければ

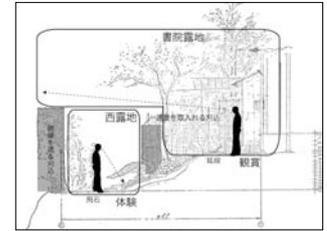


図8 対比的な空間

ならない。ゆえに西露地は閉鎖的な空間と言える。これに対して書院露地は觀賞を目的とした露地である。ここでは刈込は遠景を取入れる作用をする。また延段が敷かれており、それは一続きで安定しているため特別注意しなくても歩く事ができる。ゆえに書院露地は開放的な空間と言える。このように西露地と書院露地は閉鎖的—開放的といった対比的な空間であり、その場面は対比的な要素で構成されている。またその要素の中で刈込のように時間経過を伴う事で作用が変化するものを確認した。(図8参照) 以上のような比較分析を他の空間についても行い、そこから隣り合う空間において対比的な関係が見られる事を確認した。澗看席はこれらの対比的な空間がいくつも組み込まれている事が分かった。

5. 結論

時間経過に伴い作用の変化する要素が澗看席の様々な場面を作り出している事を確認した。またそのような要素が対比的な空間を生み出しており、さらにその対比的な空間がいくつも組み込まれている事が澗看席の空間の特性であることが明らかになった。そのような空間を茶会の流れに従って体験する事で複雑なシーンが次々と展開されるのである。

¹ 澗看席は京都市左京区黒谷にあり藤村庸軒の遺構である。室床や澗看窓、宗貞囲等の特徴的な要素などによって構成される三畳の茶室である。
² 本研究においては茶室や露地で見られる刈込、飛石、囀口等を要素と称する。
³ 茶会の流れに従い、分析を行っていくためには茶会記が最も適している史料と考えられるが、澗看席での茶会記であると断定できる史料がない。庸軒の自会記として現在分かっているものは『反古庵庸軒茶之湯之留書』『反古庵茶之湯留書』『反古庵茶会』『庸子江参茶湯之留』『古今茶湯 卷一・二・四』に収録されている全133回である。
⁴ 林屋辰三郎・永島福太郎編『図説茶道大系3 茶会と点前』角川書店 1964
⁵ 筆者が重森三玲の実測図面をもとに不足部分、特に南の庭を中心に実測を行い、現在の澗看席の茶室と露地の図面化を行った。
⁶ まず現在、庸軒の自会記と分かっているものを全て扱う事によって庸軒の茶会の流れを大きく捉える。またその茶会の流れと基本的な茶会の順序を参考にすることにより庸軒の茶会全体の流れを捉える。さらに現在澗看席で使われている道順も考慮し平面図と照らし合わせることで妥当な道順を導き出した。
⁷ ここでの分析では場面の構成要素を抽出しその作用を導くことが目的である。そのため同じ構成要素を含みかつ同じ行動を行う場面に関しては、一方だけを分析する。そうすることによりもう一方の場面についても同様の分析結果が得られると考える。澗看席では表2が示すように36の行動が考えられた。しかしシーン22~34の13の場面(表2の色のついた場面)がシーン6から18の13の場面と重複する。そのためその重複する場面の分析は省略し、23の場面について分析を行った。
⁸ 茶会には視覚の他にも聴覚、味覚、嗅覚、触覚も重要な感覚であると思われる。しかし、本論の分析を進める上では視覚が最も重要だと考える。そして要素の客に対する作用を「視線を遮る」「近景を遮り遠景を取り込む」「道行きを示す」「視線を下げる」「視線を上げる」の五つの作用に分類した。
⁹ 中村昌生『茶室大観I』創元社 1977 p.80
¹⁰ 西澤文隆『庭園論：庭—その華麗なるもの 3』相模書房 1976 p.50
¹¹ 西澤文隆『庭園論：庭—その華麗なるもの 3』相模書房 1976 p.49
¹² このように点前座と客座との境に、仕切りを設け、火灯口をかけた構えを「宗貞囲」や「道安囲」という。
¹³ 中村昌生『日本建築史基礎資料集成二十』中央公論美術出版 1974 p.92